ミリキタニの猫

日系人強制収容所に収容され、市民権も剥奪。戦後を生き抜いた画家の反骨漢ぶりにシビレる。

文・吉田真由美
よしだ・まゆみ　映画評論家

●ジミー・ツトム・ミリキタニ（漢字表記は「三力谷」）はカリフォルニア州サクラメントで生まれ、広島で育った。真珠湾攻撃の時は姉カズコとともにシアトルに住んでいたが、ほどなくツールレイク収容所に強制収容される。現在も元気に創作活動を続けている彼は、本作を見ての感想を聞かれ「悪くない」と答えたという。

9月8日より、東京・渋谷、ユーロスペースほかで全国順次公開。©2006 lucid dreaming, inc. All Rights Reserve.

最近、感動した映画見ましたか

昨今、おもしろい映画の大半はドキュメンタリーか実録ものだ。いい意味でも悪い意味でも社会が成熟し（世も末）、人々の〝ホンモノ〟を求める気持ちが高まっているからではないかしら。『ミリキタニの猫』も、〝ホンモノ〟に触れさせてくれるドキュメンタリー。主人公はジミー・ミリキタニ（1920年生まれ）というジイさま。本作の監督リンダ・ハッテンドーフが毎日歩く路上に彼はいた。ホームレスの、画家。施しは受けず、絵を売る。「フン！商業アートめ！」と他の路上画家の作品に悪態つきながらストリートをゆく。口ぐせは「Make Art! No War!」。

カリフォルニアに生まれ、母の故郷広島で教育を受け、芸術を志しアメリカに帰国したが、日系人収容所に戦後も長らく収容され、市民権も剥奪されてしまい、それでもアメリカに居続けたのは、なぜか？　アメリカの非道いところ（愛国心という名の暴力）と美点（個人尊重、情報公開）の両方をドラマチックに体験した数奇な人生が、少しずつあかされてゆく。いやあ、凄い！　『TOKKO　特攻』（公開中）の4人といい、戦争を生き抜いたジイさま方の〝反骨漢〟っぷりにシビレる!!

さてジミー・ミリキタニ、なかなかに日本男児でありまして、〈9・11〉後、リンダの好意で彼女のアパートに同居させてもらっているとき、居候のくせしてリンダの深夜帰宅に「未婚の女が〜〜」と説教しくさったり。はては、かつては料理人として働いていたくせして「うどん、あっためてくれ」と甘えたり。コノ〜ォッ！　私だったらアッタマきちゃうが、リンダはエラい！「おー、よしよし、でもね、私の人生は、お前の世話をするためだけにあるんじゃないのよ」ってなこと言いながら、〝愛猫〟を撫でるのだ。このリンダが撮ったからこそのミリキタニなのだ！

撮影・塩見一郎

●富山県生まれ。『女性監督映画の全貌』の著作などの映画評論の活動の他に、猫にまつわるエッセイ、絵本の翻訳などがある。最新刊は『LOVE FOR EVER　いつも二匹で　リーとサヴィのものがたり』（近代映画社）。